

# 神戸大学交響楽団

## 五十周年記念誌

創立五十周年記念誌発行委員会

本小冊子は  
「神戸大学交響楽団10周年  
記念」発行から5年後  
1965年に発行されたもの

## 始 め に

現在及び未来へ向っての一層の発展を促すために、ここに神戸大学オーケストラの50年の歴史をひとくちかんとするものである。

筒井台にともされた若者の情熱が絶やされることなく、今日まで引きつがれてきたのは、音楽への愛である。この創立時代の精神を再確認することによって、学生オーケストラの本質を知ることができるとともに、各時代の経験を通して、現在の諸問題を解決することができるであろう。この度寄せられた諸氏原稿からの生き生きとした活躍ぶりに、誇りを感じ、勇気づけられるものである。

音楽への愛に支えられた人間の集まりであるオーケストラにおいて、我々は純粋、真摯の精神をもって、未来への道を歩もうではないか。

昭和2年に、当時の神戸高商に御入学以来、現在に到るまで変わらず神戸大学におられ、音楽部門のお世話をしてくられた、本学経済学部教授であり、我が交響楽団の顧問をお願いしている家本秀太郎教授に、一文をお願いした。快くお引受けくださった先生に、ここに感謝するとともに今後も変わらぬ御支援をお願いする次第です。

### 神戸大学交響楽団昭和40年の歩み

家 本 秀 太 郎

昭和2年の春、神戸高商に入学して以来40年の間、私は母校の発展とともにその喜びと生みの苦しみを味わい、交響楽団、グリークラブ、マンドリンクラブの蔭の協力者として、現役学生の日頃の練習やコンクール、定期演奏会、演奏旅行、楽器の充実などの企画相談に応じたりOBの皆様方の厚き御支援の橋渡しをしたりしてきた。40年の間には交響楽団についてだけでも戦争を境として全く面目を新たにされた感が深いけれども、戦前特に昭和10年以前のすばらしい活躍と戦後の漸進的な発展とを対照しながら、思いだすままに、我が神戸大学交響楽団の後を辿ってみたい。

神戸大学交響楽団が最も大きい活躍を示したのは、上野伊太郎君の時代であった。君と私とは神戸市立神港商業以来のクラスメートであるが、上野君は昭和2年春神戸高商入学以後、当時少なかった交響楽団のピアノ奏者又は独唱者(角南浩氏などの)の伴奏者として、後自ら創設者として「神戸交響楽団」を作り、神戸大学交響楽団の指揮を兼任し、団員の交流を行ない、最後に交響団として渡満の業を成し遂げた。今日なお講堂に古色蒼然として残るグランドピアノやチェロの一部は、当時君がその絶大の熱意によって大学を動して全交響楽器の一揃を購入した遺物の片鱗であり、神戸大学交響楽団は、神戸の地に初めて生れた市民の作った交響楽団として今も語り草となっている。

戦前の活躍について今一つ忘れる事のできないのは、大先輩山中直一氏(大正8年旧高商卒、三国精錬KK会長)の今もなお続くその厚き御支援である。氏の卒業記念として贈られたアプライトピアノは、昭和34年六甲台食堂の出火の際類焼するまでのグリークラブの唯一の財産であり、交響楽団としても今日までの最大の御支援の人である。すぐれた洋楽家のたびにその若々しい御姿を拝すること

に氏の母校愛に感謝せずにはおれない。

さらに船井虎一氏（昭和3年旧高商卒）が4年の筒井ヶ丘生活の間一日も欠かさずバイオリンを片手に抱えて通学され赤煉瓦の講堂の2階で一人で練習しつづけられた熱心さは今まで40年の間に他に類例がない。

戦後の交響楽団のうちで思い出深いものは、毎年の定期演奏会と国内——主として近畿・中国・四国——の演奏旅行である。定期演奏会は、最初講堂で行っていたが、後海員会館に移った。海員会館は、神戸駅の汽車のポッポポの音そのまま入り攪乱であったが、今の神戸国際会館の建設と共にここに移った。神戸大学交響楽団定期演奏会といえば神戸大学生のガールフレンドと現役学生が会場の半ばを占め、私などは、母校であり自分の所属大学でありしかも長年お世話している交響楽団の晴れの年行事の会にこんなお嬢さまたちの花が咲くことに異様な感と限りない喜びを感じた。演奏の技術は年とともに、若干の前進をつづけている。やはりメンバーの増加という事と演奏技術との間には、平行の関係も最初はあるけれども、一方やたらに増すばかりでは質の問題も生じる。この点は、マネージャーたちのむつかしいところである。特に楽器ごとに各々別の話であるから、全体としてのバランスという点では神戸大学交響楽団のように戦後今日までいつの場合にも、メンバー獲得に最も心を痛めなければならなかった楽団の場合は、そうである。それに指揮者たる人が団員の心をとらえるという「人の和」の問題と一方では技術的に団員をひっぱってゆくだけの技術なり音楽的なカンという点で、実際に毎年この問題は収支の問題とともに、交響楽団の運営として一番むずかしい点である。専門家の指揮者の援助なり指導によって技術的なレベルを上げるという必要は、現在の交響楽団の段階では特に他大学交響楽団と対比したとき、又大物曲に野心的である場合などは是非なすべき問題ではないかと思うが、この点も実際には私のような顧問の立場のものが意見を述べる問題ではなくして、部長、指揮者、マネージャーたちが自ら決定すべきことであろう。

技術的にすぐれた演奏者は神戸大学交響楽団の場合戦後数える程しかなかったといえる。戦後の中では、フルート部門に2～3人あったのが目立つ。今の現役の勝部治樹君のすぐれたフルートは私の現交響楽団への関心を深くする動機であった。

管弦奏者もだんだんふえて来ているが、わたしの注目が自然それに向くからかも知れないが、時にチェロ部門のいい奏者ももっと出てほしい。コンサートマスターは特に学生の定期演奏会では最も人の注意をひくらしいが、神戸大学生らしい人が選ばれて好感をもつ。教育、医学部学生の参加は、たしかにプラスになった。

40年を顧みて、そして丘を巣立って行った楽人の社会活動を見て、やはり大学生活に音楽の吹き込みは是非必要なことであり、再びもつことのないこの人生というものにいい心のプラスをされたと思う。

私個人の気持からは、音楽は人生にとって「生きる喜び」というものを教えてくれた。苦しみも悲しみも音楽によって喜びに換えられ、あすの日に生きる喜びを音楽によって与えられる。国際的な音楽家のなまの音楽に直接ふれた夜は、新鮮なインスピレーションに全身がふるえ、すべての悩みを忘れてしまう。忘れては困ることまでも忘れる。

# 戦前の活動

## 大正年間

我がオーケストラの水流が筒井丘から岩清水の如く流れ出したのは大正4年であった。大正4年というと、宝塚に宝塚歌劇が生れた年であって、大正3年から始まった第一次大戦が日本に好景気をもたらした、神戸の町も貿易の拡大と共に、活気に満ちていた。当時の神戸の町は、早くから西欧文明を受け入れ消化してきた全国でもハイカラ町であったし、在留人も多くなると外国の香りの高い町であった。しかし残念ながら、音楽については、今とあまりかわらぬ不毛の地であったといえる。もちろん一般的な事であって、在留のアメリカ人達の中には、同好者が集って、コンサートを催したり、後には「天地創造」や「アリヤ」等のオラトリオを演奏したことがあったと聞く、ここで揺籃期の先輩諸氏の音楽的環境についてさらにくわしく山中氏にお聞きしてみた。

昔話をするなどは、まだ気も多少若いつもりである私には、老人めいて片腹痛い心持もするのだが、私の育った明治30年代の後半頃（1903—）から私が神戸高商を卒業する大正8年（1919）まで頃の大阪や神戸の生活の音楽的環境を思い出して見るのも面白いかと思って一寸書いて見た。因り思いつくままに考証もせず系統立った話でもない、簡単な雑駁なものであるが御諒承を願いたい。

## 幼き頃

明治36年に大阪市で、第5回内国勸業博覧会というものが催された。西欧先進国の文化産業の啓蒙的な展示であり、最も新しいアミューズメントの紹介でもあった。美術館の西の下手の広場の中央に、相撲の土俵を一回り大きくした大きさの音楽堂が設けられて陸軍第4師団の軍楽隊がここで時々演奏をやった。この時私は生まれて始めてハーモニーを持った音楽を聞かして貰ったのであった。何しろ5才の時の事で大した感動を受けた覚えもないが、何となく異国的と感じ取れる味の変ったものと受取ったと記憶している。劉喞たるという漢語の形容詞には、どうも金管によるハーモニーの感じがあるように思う。そのずっと奥に昔始めて聞いたブラスバンドのハーモニーがある様だ。

この時分の音楽的環境はどうであったか。家庭では（私は大阪の南船場の生れ）めったに音楽を聞くことはなかった。父が時々謡曲をうなるのと、祖父の誕生の祝に、仲居さん（やとな）を招んで酒間の幹旋をさせていたが、興が乗ると彼女等の三味線が鳴り出して地唄や、義太夫のさわりや、さわぎ唄が歌われた位のこれは年に一度の出来事に過ぎなかった。

後年妹達が小学校へ行く事になると、祖母が彼女達に琴を習わせた。「六段」とか「黒髪」「越後獅子」などの古典の外「千鳥の曲」とか「春の曲」などの新曲をよく耳にしたものである。家庭外では道頓堀の芝居の下座のお囃子、文楽の浄瑠璃。この時分からそろそろ唄われ出した艶歌師のうた、それから祖母の所へ来るめくら按摩の熊はんというのが覚えて来て聞かせる「きのき節」や「しのめのストライキ」などというはやり唄。

小学校では5年（私のクラスが第1回の5年生となった。だから4、5、6と3年間最上級で威張ったわけだ。）ぐらいになった時ピアノがその小学校の唱歌教室に据わった。美しい音だと思った。

併し学校の先生達は、両手の指を1本づつ使ってメロディをひくのがせいぜいであったようだ。

小学校の末年に祖母がハーモニカを呉れた。ホーナーの製品だったから音も確かに音色も勿論よかった。これが私が家の入った最初のハーモニーであった。音を探し出して唱歌のメロディを吹く楽しみの間、多数の孔を一緒に吹いたり吸ったりしていると、楽隊を聞く思い——それも高級な軍楽隊——がした。これが私には、ハーモニーを楽しみ、高度の音楽に対する、ほのかなあこがれを感じさせたようである。

その時分千日前で10銭出して入った電気館や世界館などいろんな活動写真小屋では、いわゆるジッタ（大阪では単に楽隊）が映写中に演奏していた。クラリネットにホルネット、大太鼓に小太鼓の編成で、例の有名な「美しき天然」などが最もポピュラーであったが「カルル王万才」などのマーチ、アメリカの「マーチング・スルージョージア」「ウィ・ウィル・ラリー・ラウンド・ザ・フラッグ」これらは後になって原曲がだんだん判ってきたので初めから曲名が知らされていたのではないが、何れも自然に発散する異質の情緒は、私のエキゾティズムを（映画と一緒に）そそり、はぐくんでくれた。なつかしい思い出である。

中学へ行く事になってからも、週一度の音楽の時間が3年まであった。教え方も内容も小学校時代の延長で無味乾燥、音楽を知り、音楽を愛する事を教えてくれる人は先生の中になかった様である。所が大正3年に中学5年の時、私の音楽経験が突然拡大した。中学校の専任音楽教師として元4師団軍隊でバリトンチューバを吹いていた人が赴任して来られ、この先生の指導で同級生7、8人が集まって男声4部合唱を初めて試みたのであった。和声の美しさ合唱の面白さ、楽しさを知りそして体験したのはこの時からである。この先生に後にはピアノの手ほどきをして貰った。これで私の音楽に対する理解が格段に伸びたと思う。

## 音楽への道

そこへだんだん優れた青楽を聞く機会が増えてきた。中でも大2年の秋に大阪北浜にあった帝国座（建物の外部は住友ビルの東向いに、この間まで残っていたが今取りこわされつつある）で、上の妹が通学していた相愛学院のスポンサーで音楽会が催された。イタリーの声楽家サルマリー氏、北欧人らしいピアニストのパプロフスキー氏にヴァイオリニストのズブラウィッチ氏、この3人の欧州直輸入の生の音楽を聞く事が出来たのは、私の生涯の感激だったようである。ピアノ曲やヴァイオリン曲はあまり高く、異質で、近より難く尊いものに覚えたが、サルマリーのベルカントは私を夢中にした。このサルマリーは東京の帝劇で三浦（当時は柴田）環女史とカヴレリア・ルスティカーナを日本で初めてやった人で、後に私も彼女のトソドウや、リゴットの女心のカンツォーネなどを聞いて大いに陶醉したものである。

私が本格的な交響曲を聞いたのが、大正8年東京の上野の音楽学校の定期演奏会で、ベートーベンの「英雄」だった。それとて常設的なものと云えなかったようである。そんな時代のことだから、この学校にも交響楽団のようなものがある訳はなく、あるとすれば、ヴァイオリンの合奏団、よく行ってセロとピアノが加わるという程度であった。筒井が丘の隣にいた関西学院も当時はこの程度だった。尤も慶大には伊太利人のサルユリか誰かが指導したマンドリンの合奏団があった。マンドラヤギ

ターを低音楽器とした、堂々たるもので、さすがと感じもし、又何くそと多少の闘志も燃やした。

この辺りから私が音楽の道に直進する運命が決った様である。一方、神戸高商の学生は至って蛮力な学生が多かったようである。それが皆の誇りでもあり、又保存に努めた重厚味でもあった。大正4年には、2、3回生の時に既にあったというグリークラブは当時ただの2人に減ってしまっていたし、器楽の方は、今でいうクラブ活動は、なかった。この年本科2年の諸氏（伊藤、山崎、宮崎）が提唱されて、ヴァイオリニスト遠藤和一氏（当時「チゴイネルワイゼン」を弾いたというので、有名だった音楽家であった。）に師事した。山中氏は故嘉納悌治氏とともにマンドリンを携えて、この団体に入り時々ピアノの伴奏をされ、編曲の方法を学ばれた。

神戸大学オーケストラ史上初めての演奏は、大正4年の語学大会でのアトラクションとして行なわれた。この模様を伊藤則忠氏にうかがってみた。

「大正初期の母校は所謂葺合の村塾で、全く何の娯楽も無かった。学校としての大きな催し物は、春の敏島浜のボートレース、秋の校庭に於ける陸上運動会、年末の下山手のキリスト教青年会館での語学大会位のものであった。

当時としては余りに趣味が無さ過ぎると思い、同志語らいヴァイオリンのクラブを創めた。東の安藤幸子、西の遠藤和一と並び称された大ヴァイオリニスト遠藤先生に師事して学生会館で練習を始めた。仲々敷重な稽古で、1回の稽古はフォーマー教本2行位宛、教本1を習うに相当時間がかかるために、初めは12、3名あった会員も次第に減少して、これではならぬと語学大会に出演することにした。

ヴァイオリンが3部位に分れて、山中直一君（大正8年卒）のピアノ伴奏で猛練習した。当時母校にはピアノは無く関西学院のチャペル（現在王子公園に現存する赤煉瓦の教会）を拝借して練習した。曲は簡単なワルツであったと思う。

語学大会に出演して、ワグナー・ソサイティが公開公演した。母校としては全く初めてのことで、好評であったらしい。

これは大正4年12月8日のことである。全く幼稚な貧弱なものであったに違いありませんが、当時としては画期的なこととて評判はよかった。

以上の如く、神戸大学オーケストラは、その初めての演奏会を好評のもとに終えた。

当時はレコードも楽譜も市販されていない頃で、すべて有限の楽器の範囲内にて楽譜を編曲せねばならなかった。これをほとんど山中氏がされた。



大正6年12月語学大会での演奏（YMCA）

この合奏団は、大正5年には、部員を募り「グリークラブ」を拡大し次いで楽器は何によらず持ちよっての合奏団へと成長した。部員は十数人になっていた。大正6年（1917）12月の語学大会（第11回）にはマンドリンオーケストラの名で出演した。編成は、マンドリンとヴァイオリンの外に2本のフルートとチェロを加えたもので、これは今でいうマンドリンオーケス

トラとは、区別すべきものであろう。次第にマンドリンを分離すべき傾向にあった。

大正7年には、フィルハーモニックソサエティと名乗りヘンデルのラルゴを演奏した。8年の第12回語学大会には、山中氏の指揮のもとに、作曲されたばかりの商神マーチとベートーベンのスケルツォを演奏した。このようにして次第に出演の機会も2、3回と増え、曲も種類も多彩になっていった。翌9年の9月には第5回関西学生英語雄弁大会に出演し、ヴェルディのトラビータよりの抜萃曲を演奏している。

この時期の様子を山中氏にうかがったお話で紹介しよう。

「このソサエティに、マンドリンを入れたりした不純さはあっても、セロを弾いた内山博二君（15回）と、フルートを吹いた福井孝一、中村勝四郎（何れも13回）の両君がいたことが、今日のオケに育っていく素地を造ったことは否めないと思う。私として実におこがましいというか、身のほど知らずというか、云うも恥ずかしいのであるが、卒業の前年の秋、「神戸高商大行進曲」という名のみ堂々たる曲を作って演奏して貰った。当時の演奏の機会は、年末行事である語学大会であった。当時の校歌「商神」と「大旗」をテーマにした行進曲風の序曲のようなもので、もとより幼稚極りなく、チャイコフスキーの「1812年」をまねたりしたものであった。でも、序奏があり、「商神」と「大旗」とが曲調を変えて出て来、トリオを経て「商神」を拡大したフィナーレに終る構想で、おなじみのメロディが主として出て来るので、演奏者にも、聴衆にも大いに喜ばれた。このような曲を持っている学校が、当時外にあるかという位が、そのときの私のほこりであった。昭和8、9年の頃には神大オケが急に大きくなったのではなかったか。当時のコンダクター上野伊太郎君が、この曲のあることを知って、オーケストラに書き改めてほしいと頼んで来た。私はオーケストレーションのことは全く知らないにも拘らず、彼の熱意にほだされたような格好で、やっつけ仕事にでっち上げて上野君にスコアを渡したのであったが、これが曲りなりにオケの一つの紐帯になったかも知れないと手前味噌ながら思うのである。このスコアも戦時中に失われたし、私もすっかり構成を忘れてしまったので、この曲も昔校内で売るために吹き込んだレコード1枚を残してこの世から消えてしまった。お蔭で私の若気の至りの、恥の塊がなくなったわけだが、当時演奏してくれた人達の中には、なつかしんでくれる人もいようである。

何といっても時代である。当時ヴァイオリンと云えば、どのお嬢さんと箏曲を合奏するのを楽しみに稽古した位の時代だから、それ相応のものしか出来ようがなかった。が、そんな程度より1、2歩は進んだ形で次の山田真三君に渡したつもりだ。とはいえ、私達の蒔いたひょろひょろの苗から、今日の神大オケにまで成長しようとは。

代々の学生諸君、その指導者諸君の熱意と努力と協力に深く敬意を表するとともに、その輝かしい将来に祝福を送る次第である。

その後大正10年から11年にかけてフィルハーモニックソサエティはきわめて活発な動きを示している。大正10年には、語学大会出演の他、大津や姫路で演奏会を持っている。学友会報によれば、姫路演奏会は彼地で有史以来2度目の音楽会であったそうで、大好評であったらしい。演奏会は、フィルハーモニックソサエティの単独のものではなくコーラスや部員によるピアノやヴァイオリンのソロなども交えた変化に富んだものであった。翌11年には、高商の音楽部が単独に主催して行った最初のグ

ランドコンサートと銘うった演奏会が行なわれた。2月11日YMCAで行なわれたこのコンサートには、高商の音楽人口がすべて集められ出演したが、その規模の点からみても、又喫茶店のメニューを思わすような洒落れたプログラムからみても当時の音楽会としては、一流のものであった。フィルハーモニックソサエティはこれに3ステージ出演した。合奏3曲、山本潤氏のピアノ、竹内稔氏のヴィオリンなどのソロやマンドリン四重奏なども行なわれた。

大正11、2年、我がフィルハーモニックソサエティがいかなる活動を示したか、残念ながらはっきりしない、ただ13年に入学された大西武夫氏の時、管楽器が購入された事は、特筆されるべきだろう。従来管楽器が使われていたとはいえ、ここにながしかの楽器が本格的にソサエティ所有として存在したのは、やはりオーケストラ史上、一つの画期であったとすることができる。それは昭和初めのフィルハーモニックソサエティの隆盛の礎の一つであったと思われる。

この事情を大西武夫氏に話してもらった。

「私が音楽部に籍を置いたのは、大正13年の春から15年春までの2年間で、まさに大正末期に当る訳であります。当時の音楽部には、マンドリンクラブ、グリークラブ（合唱団）および私の所属したフィルハーモニック・ソサエティ（弦楽合奏団）の3グループがあり、部長は田中金司教授だったと記憶しています。

私がいっところの編成は、第1と第2のヴァイオリン、ビオラとセロ、それにピアノという、誠にささやかなものでした。練習していたのも、校歌を山中直一氏が編曲された「商神マーチ」くらいで、校外で演奏することもなく、講堂で開かれる恒例の音楽会や語学大会に出演する程度でありました。

大正14年になって、私はなんとかして管楽器を加えたいとの欲を起したものの、部では全然予算が取れないため、同志と図って、先輩から寄付を仰ぐこととし、分担して資金獲得に奔走しましたが、なかなか予定したようには集まらず、結局不足額は私の父に出させて、ようやくクラリネット2本とフルート、トランペット、トロンボーン各1本を手に入れ、バスと打楽器は借用ということで、貧弱ながら、どうか格好だけは付くことになりました。

しかし、次の問題は奏者で、八方物色した結果、やっとメンバーをそろえて練習を始めたところ、途中で落伍する者が出たりして、難行はしましたが、ともかくも、卒業まえに開催した音楽会では、「商神マーチ」のほか、ブラームスの「ハンガリー舞曲」とルビンスタインの「天使の夢」とを演奏することができました。

オーケストラ以外に、弦楽四重奏（チャイコフスキーの「アンダンテ・カンタービレ」）とピアノトリオ（シューベルトの「楽興の時」と「軍隊行進曲」）を演じたのも、忘れ得ぬ思い出です。

私は、小規模ではありましたが、管弦楽なるものを最初に上筒井の講堂において鳴らしたと、長い間自認していました。ところが、最近になって、どうも私の入学以前に演奏されたことがあるように見受けられてきたのですが、いかがでしょうか。

以上年代を追って大正期のオーケストラ活動をたどってみた。そこには、当時の社会がうかがわれ、学生の気質もあらわれているようだ。

西洋音楽が日本に紹介され、啓蒙的役割をはたしていった時期に、我がオーケストラも遅々として

ではあるが、地味に又堅実に歩をすすめてきたといえるだろう。一方グリークラブ、マンドリンクラブ、フィルハーモニックソサエティは完全に三分されておらず大抵の人は、かけもちで、色々と活動されたようである。

## 昭和年間

昭和時代に入り、いよいよ戦前最高の時期に近づく。部員諸氏は意気軒昂、練習にはげみ、「未完成」、「パデレフスキーのメヌエット」、「ピッグダム」などをマスターしていた。

昭和2年の夏季休暇には、山陽地方への演奏旅行を行なっている。この地方演奏について角南氏からの寄稿を次にかかげる。

私が神戸商高に学んだのは大正14年から昭和4年の4年間である。予科に入学するとすぐ好きな道でグリークラブのメンバーになった。ところが音楽部といっても管弦楽団とマンドリンクラブの3団体でせいぜい30名か40名しかいないので1人何役かをつとめる始末である。毎年5月の記念祭行事の音楽会ともなると大変である。当時は何事も卒業1年前の本科2年生がすべて中心勢力であった。その頃の私は音楽会にはほとんど出っ放しという格好になる。グリークラブの指導をして、独唱をして、マンドリンオーケストラのマンドローネをひいて、管弦楽団のコントラバスをひいて、まさに1人5役ぐらいをつとめていたからである。

グリークラブといっても12名から、多い時で16名ぐらいかき集められるのが盛一ばいであった。

さて、管弦楽団——交響楽団などいえたものではない——のメンバーだが私の記憶をくってみる。残念ながら肝腎の指導者が思い出せない。24回の山崎隆夫君や学3の上野伊太郎君の記憶もある。山崎隆夫君はギターをひいていたし、マンドリンオーケストラの指揮もしていた。コンサートマスターは22回の船井虎一氏で、ヴァイオリンは23回の小倉五郎君、21回の神戸二郎氏、学3の赤坂忠次君などであった。殊に大先輩の19回高津奈良男氏が賛助出演していただいたのは有難かった。チェロでは21回の丹波三郎氏、25回の故江藤真君が印象に残っている。管ではトランペットの達人で22回の西野曠氏トロンボーンでは22回の早崎広種氏がいた。クラリネットやフルートとなると人がいないのでお隣の関西学院から両刀使いの名人一名前を忘れた一を借用に及んでいた。借用といえばピアノも小倉君の神戸一中の同期かで尚美堂の御曾子江藤君を引張り出していた。打楽器は22回の橋本順治氏、コントラバスが私といったソキハギだらけの陣容であった。そのコントラバスも音楽会前に三木楽器から賃借する始末である。それでも山中直一作曲の「商神」などの演奏ではヤンヤの喝采を博したものである。

こんな状態だから私など音楽会の前2週間ほどはロクに授業も受けられない。ゼミの方も音楽部長の故小川忠能教授であったので大目に見ていただいたものである。

忘れもしないのが昭和3年の夏だったと思うが、関西学院と合同で演奏旅行にいったことである。

開催地は尾道、広島、福山の3カ所でいずれも土地の凌霄会支部の主催である。指揮者は山崎隆夫君で、ピアノに関学の故大沢寿人君が一緒だった。大沢寿人君は関西が生んだ楽壇の鬼才で、現朝日放送原専務の同期生で、ラジオ開局当時大活躍をしたが、惜しいことに若くして過労のため故人となった。この演奏旅行がなかなか傑作である。マネージャーは西野曠君。彼こそは音楽の虫のような男で、授業にはほとんど出ないが、音楽の練習は欠かしたことがない。たしかセミプロとして尾崎のダンスホールのバンドに出ている、起きるのが昼頃という有様だったとか。映画がトーキー時代になって西梧朗とって日活の音楽監督で鳴らした凌霄変りダネの1人である。

この西マネージャーがとにかく今度の演奏旅行は成功間違いない。必ず倍にして返すから10円ずつ出せと言って団員から資金集めをして出かけた。

最初が尾道で、先輩宅へまず落つく。その前に地方ではどうしても日本ものをやらないと人気がないからとて、急ごしらえで勸進帳や春雨を仕込んでいった、先輩宅へ行くと、自動車を用意してあるから「街廻り」をしてくれないかというのにはあきれてしまった。「街廻り」というのは人集めのためのチンドン屋である。いたしかたなくオープン自動車に楽器を担ぎ込んで、ブカブカドンドン街中ふれあるいた。オープンのボロ自動車の座席のうしろに立ってコントラバスをひいた図など、まさに漫画ものである。

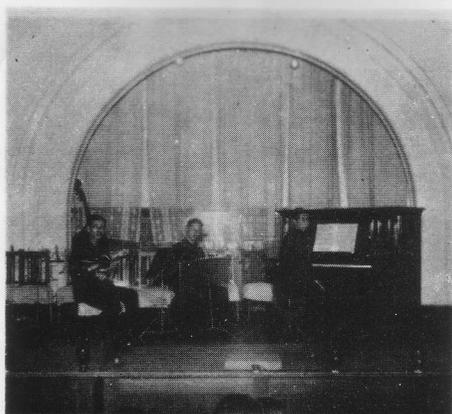
また、会場が小学校の講堂で、瀬戸の夕風といってムシ暑いことこの上ない。その上、蚊がものすごい。壇上に蚊取線香を林立させ上衣はかなぐり捨てての無礼講演演奏会である。汗は滝のように流れる。蚊は足許を襲うでおかしいやら、難儀なやら、それでも最前列にずらりと並んだ尾道芸者のやんやの拍手に一同張切らざるを得なかった。

福山では音楽同好会が何くれとなく大変サービスして、花環などいただいた。3市の中で、音楽的には一番進んでいた印象は今でも忘れない。しかもモダンなドームステージを持った公会堂が竣工直後だったと思う。広島の小学校のステージと天井の間がせまっていて大変やりにくかったことも記憶にある。演奏曲目は、勸進帳の外、未完成、カルメン組曲、スペードの女王、バグダットの盗賊、チャイコフスキーのアンダンテカンタビレなどであった。

最後が福山であったので、軽便鉄道で鞆の浦に行って遊んだのが唯一のリクリエーションであった。そして皮算用の10円投資はそのまま永久に返って来なかった。当時の学生に10円は大金であった。西マネージャーは一同からうらまれ放しである。

昭和3年、5月17日には神商25周年記念音楽会を行い、小倉、角南、江藤、上野、大岡の諸氏が、ヴァイオリンソロ、ピアノトリオ、ヴァイオリンソナタ等を演奏した。この当時は音楽部としての出演であった。12月8日には秋期定期演奏会が行なわれ、ピアノトリオ、ヴァイオリンソロが行なわれた。その当時の商大新聞によれば、管楽器の人が足りないために、オーケストラ演奏ができないのを嘆く一文がでている。

昭和4年には、6月22日講堂に於いて音楽会が開かれ、岩崎、上野、江藤氏らによるピアノトリオで、ブラームスの匈牙利舞曲第5番等、江藤真氏のセロ、上野伊太郎氏のピアノ伴奏でポールワッシュの曲、岩崎氏のヴァイオリンソロでザイツのト短調コンチェルトが演奏された。同年12月15日夕、音楽部の公開音楽会が開かれ、上野氏のピアノソロ、岩崎氏のヴァイオリンソロが聞かれた。こ



昭和4年 ピアノトリオ

昭和5年7月4日下山手青年会館において音楽部後援会主催の吉田顕世氏のチェロリサイタルが行なわれた。

同年12月6日、恒例の音楽大会が行なわれ大聴衆に対し、復活されたオーケストラによって有名な「商神マーチ」が演奏され、素晴らしい人気を得た。

当時の新聞によると「クワルテットには練習の充分でないことを示すぎこちなさがあった。トリオに比して聞劣りがしたのは遺憾、岩崎君のヴァイオリンソロは昨年に比して一段の技術の進歩が窺われた、ソナタの第2楽章で伴奏と合わず中止してやりなおした芸術的良心のあらわれは注目に値すべきものである。上野君のピアノソロは演奏の立派さをピアノの悪さが傷つけている。オーケストラの久し振りの復活は嬉しい、メンバー中になお未熟な人があったとはいえ商神マーチはやはり音楽会で丘人の一番聞きたいと思う曲目であり商神合唱は一層その価値を増した全体を通じて学生らしい真摯さが充分溢れていて好感を与えた。」とある。

昭和6年4月には明石小学校で、また、同年5月16日の音楽大会に出演した。同年には商神マーチがレコードに吹込まれた。このレコードは現在1枚、三越音楽隊のものが残っているだけである。なお、この年からフィルハーモニックソサエティ主催の名曲鑑賞会がしばらく行なわれた。

同年6月27日は我がオーケストラが一人立ちし、前進への足を踏みだした日である。即ち神戸商大フィルハーモニックソサエティとして始めて独自で、第1回管弦楽大演奏会を開いたのである。その模様は、新聞に次の如く表わされている。

当日は上野伊太郎氏の指揮で、学の内外から集まる聴衆六百数十、階上階下文字通り立錐の余地なき盛況を極めた。まず商神マーチに始まり、次いで雨滴、男声合唱、ロマンティック、ヴィオロンチェロ独奏、混声合唱等の演奏があり、一流のセロイスト一柳信二氏の独奏及び、楽界に令名ある若葉会の混声合唱は満場を陶醉せしめた。

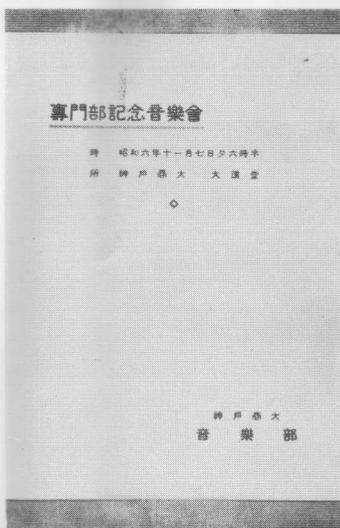
同年11月7日講堂にて専門部記念音楽会が行なわれた。これは神商大附属商専が廃止されるため、

こで当時の新聞による音楽部評をみると、現代の我々にも通用しそうなものがあると思われるので転載する。

「音楽部は神戸マンに常得意を持つ音楽大会に気をはいたのみ、この部が簡台文化宣揚のため自覚的行動をとることが望ましい。墮勢によって行動することをやめよ、学生の興味関心のいづこにあるかを研究し新しい活動領域と活動様式とを開拓せよ、部員全部が部の活動に積極的に参加せよ、特に学部から部員を得よ等々かくしてこそわれらは活気に満ちた1930年を迎え得るのだ。」



昭和5年 吉田顕世氏をかこんで



#### 専門部記念音楽祭 プログラム

さらに同年3月学期も終らんとする15日付の新聞には、1年間の華々しい音楽部活動を回顧した後、一層の発展を期し、管弦楽部は、今春発表する曲目も、シュベルト「未完成交響楽」ズッペ「白衣の婦人」等を選び関西楽団に雄飛しようとしている。と共に部員募集を行い楽譜の読めない者でも大いに歓迎と呼びかけている。と記されてある。

昭和7年5月記念祭では上野氏の指揮で演奏した。6月には賛助出演に前述の吉田顕世氏（セロ）を迎えて管弦楽大演奏会が行なわれた。10月28日にはYMC A主催の演奏会、11月12日には秋季合同演奏会で、天国と地獄、序曲バクダッドの酋長、ハイドン、ドボルザークの弦楽四重奏曲を演奏した。

11月10日はBKにて放送のため録音を行なっている。12月には定例のごとく管弦楽大演奏会を持った。この当時はかなり忙がしいオーケストラ活動であったと考えられる。

昭和8年、我がオーケストラ、ファイルハーモニックソサエティに全盛期が訪ずれた。戦前、戦後を通じて現在までの最高の状態がこの時期に現われたのは、社会的要因などもあるとしても、なお当時の先輩諸氏の熱情あつてのものであると考えるに異論なきことと思われる。我々後輩としては感嘆の念を禁じ得ない。

さて前置きが長くなったがこの年の活動をみよう。5月創立記念演奏会では上野氏の指揮によって30周年記念歌、商神マーチ、エグモントを演奏、続いて6月、第7回定演を「ベートーベンと、ビゼーの夕べ」として、ベートーベンの葬送行進曲、井上百合子嬢によるピアノ協奏曲一番、ビゼーのアルルの女を演奏したが、会場は満員、実力の程がうかがわれる。また、同時に「The Orchestra」が発行された。

7月にはBK主催の関六管弦楽放送コンテストに参加、ベートーベンの*Pf Concerto No. 1*、ハイドンの軍隊行進曲の一部を演奏した。同年夏、満鉄の招待による満州演奏旅行を行った。

次に満州へ行かれた諸氏の寄稿による誌上対談を集録する。

#### 満州旅行誌上対談

村井 私は大学生生活の思い出の大部分は、オーケストラの楽しみで、よく両親から音楽大学を卒業したのではないかと言われたものですが、そのオーケストラでの最大の思い出は満州の演奏旅行にあったと思います。

岩崎 あれは昭和8年でしたね。私が丁度大学をでた年の夏の事です。上野君が、指揮者として大活躍しておられましたね。戦前の神戸商大オーケストラとしては一番充実していた時でしたね。

村井 金策には全く苦勞したものですよ。上陸後の費用は一さい、満鉄にもってもらったり、神戸からの往復船賃は5割引にしてもらったり、とにかく、いろんなつてをたよって走りまわりました。

上野 楽器の編成にも苦勞しましたね。人数がたった20名でしたから。それで、シューベルトの未完成やベートーベンのピアノコンチェルト一番をやったのですからね。一人の人間がヴァイオリン、チェロ、オルガンなど、あらゆる楽器を転々としたものです。

村井 当時僕は大学3年生でしたので、押し出しコンダクターでしたが、今から考えると冷や汗ものです。

岩崎 大連に到着して、上陸第一歩の印象がまだ強烈にのこっている。煉瓦と土で作った家屋、満人の服装、ニンニクの悪臭。満鉄本社はさすが満州経営の拠点であっただけに威風堂々としていましたね。

村井 上陸後、大連、星の浦で2、3日練習してから演奏会を開きましたね。こんなことがありました。4、5日目頃から徳永先輩が歯痛を訴えはじめた。トランペット奏者であるだけに、歯痛ときてはたまらない。遂にどうしても吹けないとなって、そのパートの必要なテーマ、ハーモニーは他の楽器に依存しなければならぬ。そこで楽譜の調整を図り、何とか演奏会を成功裡に収めたという涙ぐましい一面は忘れられない思い出となっていますよ。

上野 どうしてもやらねばならぬという使命感が確固たる団結を呼んだのでしょね。日夜、猛練習、どれも暗譜で演奏できるほどでしたね。そのかいあって、内地を離れて何の娯楽もない僻地の兵隊さんが、どの会場にも隊伍を組んで、あつまり、現地の支那人と共に我々、日本の学生の演奏を心から歓迎して聴いてくれたのには、本当に感激しました。

岩崎 コースは、大連、鞍山、撫順、新京、安東、旅順、大連と2週間程でしたね。各地でいろんな所をみました。奉天ではダンスホールから祝電がきてびっくりしましたね。そこで以前、神戸の花隈にいたダンサーから、歓迎を受けて、大いに気をよくしたものだ。

上野 鞍山では、当時としては内地でもみられない程優秀な技術をほこった昭和製鋼製鉄所にいたり、撫順では、地下数百メートルの炭坑にもぐったり、我々もタフに動きまわったね。

岩崎 新京からハルピンにも行きたかったね。当時の満鉄は新京までだったから、実現しなかったが。安東は、軍隊の町というかんじだったね。皇軍慰問が主体だった。

上野 安東からは旅順、広瀬中佐で有名な旅順港の遺跡を見学した。いろいろなところを訪問させていただいたことは生涯忘れ得ない思い出ですね。

村井 大連の夜風に吹かれながらヤンチャー（人力車）をとばして、大陸での2、3日をすごした後、ウッスリー丸ののって神戸へ帰ってきた時はほこりに、満ち満ちていましたね。あのよう



翌年（10年）六甲台の最初の卒業生である吉田氏は、当時をなつかしんでアマチュア・オーケストラの特質に思いをはせていられる。以下その文章である。

「もう随分昔のことになりますが、マネジャーをしていた頃を振り返ってみますと、学生オーケストラのあり方のようなことが思い出されます。社会へ出てから久くなる今日、つくづく思われますことは、学生団体の一つであるオーケストラが、同じ学校に在学する団員から成るといふことの外、なんら制限がなく、音楽を愛好する者のみの自由な集まりであったということです。時に友人にすすめられて入会する場合もあるでしょう。でもそんな場合、多くは長続きしないものです。結局技術的には各々差はあっても、本当に音楽を愛するということが団員の結びつきのもとをなしていたのではないかと思います。そして毎年の卒業ということを通じて新陳代謝を繰返す学生オーケストラでは、これをうまく調整あって楽しい集団音楽行動（＝オーケストレーション）をつくり出し、それを通じてお互いに結びつくことが、本当の学生オーケストラの姿であったらうと思っています。

一方、第2ヴァイオリンのメンバーとして活躍した頃の話は、卒業後30年を経た今でも楽しく思い出されます。同郷の村井兄と共に昭和10年卒の私は、六甲校舎での第1回目の卒業生で、学校移転は前年の夏でしたから半年間を六甲で過ごさせて戴いたのです。新しい校舎も感激でしたが、その移転行事の中で校歌の演奏をしたことは一層の感激でした。その時集ったメンバーは少なかった様でしたが、未完成の校庭にテントを張った野外で演奏した弦楽合奏の商神校歌は六甲史の序曲でもありました。≡

この年、舞鶴、奥丹後演奏旅行が行なわれた。14～5名の参加であった。

昭和10年6月19日には宮地厚三氏の指揮で第11回定演が行なわれた。指揮者の宮地厚三氏に登場いただき指揮者になるいきさつなどを述べていただきますよう。

### ≡小生が指揮者になったいきさつ≡

母校の交響楽団が50周年を迎えるとの事で誠に欣快にたえません。若い方々の意欲的な活躍のお陰で楽団が益々発展していく模様を拝するのはその50年の長い歴史のたとえ僅かの一駒に過ぎなくても、指揮者として登場させていただいた小生としては大変にうれしいことです。

小生が先輩上野伊太郎氏、村井澄也氏のあとを継いで棒を振るようになったのは、今から考えても全くおかしな話です。幼少の頃からピアノを弾いては居りましたが、オーケストラへ入って持たされた楽器はヴァイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス、オーボエ、クラリネット、ホルン等々、演奏会ごとにポジションが違って居ました。殊に満州演奏旅行の時は、ピアノコンチェルトとベートーベンの第1番をやるからソロの練習をするようにと先輩上野氏に命ぜられたり（これは遂に実現せず）かと思えば長途の疲れで、特に管楽器の連中が口が締められなくなり、すき間風のような音ばかり出るようになった時には、急拠オルガンを登場させて誤魔化すこととなり前代未聞のオルガン入り「未完成交響楽」の主犯にさせられたりした。しかもその当時のオルガンは、例の足でブカブカ踏む奴だから、ピアノだけで育った小生にはつい足の方がおろそかになる。間の悪い時に管楽器の連中も楽器を口にくわえた儘で音の出ていない時に当方も足を踏み忘れるという瞬間が到来した。將に棒振れ

ども笛鳴らざる空白である。恐る恐る譜面の隅から見上げると、指揮者上野伊太郎氏のうらむが如く泣くが如き悲しげな眼が此方をにらんで居るのである。あの時の上野先輩の顔は30年後の今日でもまざまざと小生の眼前に浮んできます。

とまあ、以上のような次第で何をさせても雑音ばかり出す小生に皆の者があきれ果て、宮地には音の出ない楽器を持たせるのが一番無難であるという事で遂に指揮棒を持たされるようになったのだと今でも思っています。

この宮地氏によって、商大のクラブとしてより、神戸のオーケストラとなって行く様子は、神大オーケストラ10周年記念誌に詳述されている。

さて、昭和11年になり、3月、神戸市主催で行なわれた趣味講座の音楽部に、一役買って出た本学管弦楽団は、後期終了と同時に、全員こぞって連日連夜練習の後、3月28日海員会館で演奏会を開き、講師としての役目を果たした。同夜は「未完成」を中心に、数種の曲目を演奏し、市民の絶讃を博した。

6月26日第13回定演が行なわれた。指揮浦野忠氏、ソリスト永井静子氏で、モーツァルト「ピアノ協奏曲二短調」等が演奏された。同年12月では第14回定演にラロのセロコンツェルトが行なわれたが余り成功ではなかったようである。

昭和12年指揮は、村田正敏氏、マネージャー西村俊一氏と変った。西村氏に当時の模様を語っていただく。

「私が神戸商業大学に入学したのは昭和11年4月、早速オーケストラ部に入部してトロンボーンとフルートを吹いた。

当時部員は約25名、コンダクターは浦野忠君（6回生）マネージャーは副島陸郎君であった。定期演奏会は6月末と12月初旬の2回で、神戸の同好者、関学、先輩等の応援を得て35名位で、なんとか一応の形式の整った演奏会がやれた。

12月の演奏会がすんだ後、副島マネージャーに呼び出され、来年度は7回生の中からマネージャーを選ぶのが普通だが適当な人がいないので、異例だが君が是非引受けてほしいとの話があった。とにかく一部の7回生と相談したが既に副島マネージャーが工作してあったとみえて、誰もが「君がやれ」とのことで強引に引受けさせられてしまった。ところが翌12年に支那事変がおこり「国民精神総動員」が展開されて「アルバイトディーンスト、勤労奉仕（新語）」がはやりだした時で、音楽なんか軟弱の一語で片付けられるという、今考えれば思いもよらない時代に直面し、むりやりに勧誘した9回生も尻込みをして出てこない。それでも京大の友人迄動員して25名程で先輩上野伊太郎氏をコンダクターに招き、辛うじて2回の定期演奏会をやりとげた。現関西交響楽協会の朝比奈隆先生（大阪フィル常任指揮者）に京都大学の学生服で第一バイオリンを手つだってもらったのもその頃である。3年の時の春季演奏会は涼々たる姿で淋しいながらも何とか演奏会らしきものを神戸海員会館でやった。しかし10回生の部員は僅かに1名という姿で、翌年からは思いやられた次第でした。春季演奏会がすんだので9回生の赤松君にマネージャーを譲ったものの、もうその頃は支那事変の戦局が拡大して、12月の定期演奏会は出来なくなっていた。いよいよ卒業も目前にせまった正月すぎに、赤松君に「当分オーケストラは駄目と思われるが、せめて次の時代の為に、楽器だけは保管して代々のマネー

ジャーに引き継いでいってほしい」と頼んで卒業した次第でした。

参考までに当時のオーケストラ部所有の楽器を申し上げると、ビオラ・チェロ、各1、コントラバス、2、クラリネット、2本、オーボエ、1本、ファゴット、1本（これは今もあるそうです）フルート・トロンボーン・ホルン・各1だったと記憶している。

神戸大学交響楽団が輝かしい50周年を迎える今日、遠くすぎ去った私のオーケストラ部時代を回想すると共に、立派に成長したオーケストラに感慨を新たにした次第である。

昭和13年以降商大オーケストラは一時的な盛り返しはあったが、第二次大戦の影響をうけ、社会的圧力もあり衰退せざるを得ない状況となってきた。しかし今井基介氏や、当時の先輩（岩崎、上野、浦野、西村、宇治の諸氏）によって復興が図られ、昭和15年には、6月と12月に定演を開くことができたが、商大オーケストラは、神戸市民のオーケストラへと発展(?)吸収されて行くこととなった。今井氏の寄稿によってこの時代を振り返ってみよう。

### 大東亜戦争寸前の神戸商大オーケストラ

思えば昭和13年4月神戸商大に中学同級の安達兄神戸一中同級商大在学中2期オーケストラ指揮者卒業後塩野義製薬入社応召後中支で戦死）と共に入学したのが私と神戸商大オーケストラとの結びつきの始めてした。当時部員は殆んど皆無に等しく正門横の音楽部々室には当時としても古く立派なチェッコ製のプラス楽器、パーズン、コントラバスにピアノがころがっていました。何かの機会にオーケストラに入った安達兄の心意気と更に高商同級の杉山兄の誘めもあって、当時レコードできき楽しんでいた私の楽器への興味（それに加えて大学在学中に何か一つのものにしたい気持で）が大げさに云うと神戸商大オーケストラのとだえかけたものを戻したきっかけでした。

## Vn の 功 徳

昭2年卒（高商21回生） 橋 本 宗 夫

私が15才の頃、母親の娘時代のお祖未なヴァイオリンを土蔵の中から持ち出して「おもちゃ」にしたのがヴァイオリンの持ち始めであった。当時、今から45年前の大阪島の内の商家は、小説「のれん」に出てくる情景によく似ていた。働くこと財産を蓄積すること商売大事が至上命令で今日の若い人には想像も出来ない時代であった。それでも女の子にはピアノを習わせていたが、男子が楽器を扱うことなどは優柔不良と見なされたものだ。当時は勿論ラジオのない時代で毎月3回、街に出る夜店を見て歩くことが庶民の楽しみの一つであった。夜店には必ず書生袴をはいた2人1組のヴァイオリン奏者が居って1人が弓の中央を一寸つまんだキザな恰好で楽器をならしながら客を集め、当時の流行歌を唄い他の1人がその歌詞を書いたパンフレット1部1朱で売っていた。それが流行歌のひろまる大きなルートであった。私など家でヴァイオリンをやると親父に夜店の真似をするなど叱られたので、友人の家や土蔵の中でかくれて奏いたものであった。

それからは、楽器はあるが楽譜がない、そこで当時レコード鑑賞用の総譜を見て講義時間中にこそ、こそとコピーしたものです。

一応楽器楽譜は揃ったもののメンバーを集めねば演奏会も開けなかったのです。部員は殆んどおらず先輩メンバーは応召して軍隊へ行かれオーケストラ演奏会再開は非常に難しかったのですが幸い先輩の布石で当時の神戸には神戸商大オーケストラをオール神戸フィルハーモニーにも発展させたいという気持の市民もおられ賛助部員が居られましたので集って頂き更には翌年14年入学してきた安本兄、小西兄、船津兄らの加入もあってやっとオーケストラらしくなったのです。

当時は6月と12月とに定期演奏会を神戸海員会館で開いたのですが練習は上筒井にあった教会のホールで行いました。費用はわずかでしたが大学から頂いた費用の外にプログラムに広告をして頂いた費用とで賄ったものです。尚メンバーは勿論学生現役部員に先輩諸兄更に先述の市民有志メンバー（賛助部員）でした。当時の時世では音楽をのんびりやることも出来なかったのですがこんな時でも音楽をやろうという人で気持のよい、今思い出してもなつかしい人々ばかりでした。

さてプログラムは色々やりましたが開会にあたり「君ヶ代」、終りには「愛国行進曲」をやり聴衆者一同合唱したものです。

聞いて頂いた皆様も伝統ある神戸商大オーケストラということでいい人ばかり会場を埋めて頂きました。しかし世の中はポツポツ大東亜戦争の下準備が進んでいたときで私も丸刈の頭で演奏会にでたこともありメンバーの皆様も応召されていかれました。16年3月に卒業した私もサラリーマンになりましたがやがて16年12月大東亜戦争がおこり音楽どころではなくなりましたがこの伝統ある神戸商大オーケストラの演奏会だけでもつづけたく後輩の皆様のおかげでつづけられていたものです。17年4月応召しましたので一時とだえましたが戦後新しく神戸大学の皆様で引きつがれ一層立派なオーケストラになっているので大変うれしいです。

憧れの神戸高商へ入った頃1年程一寸した町の音楽教授所でカイザーの2まで習っただけでグリークラブやオケに入れてもらって始めて合奏の喜びを知り、青春時代のよき日を送ることが出来た。以来時たま持ち出して独り楽しむ事もあったが、塵にまみれて押入に入れてある方が多かった。終戦後ふとした事からオールドヴァイオリンを手に入れ、そのものの音色の深さに魅せられて、楽器を左右から離せなくなり、技は一步も進まないが、結構リクレーションの効果を発揮していた。昨春、経営学部11回卒の中島良能君を弊社に迎えてから急にアンサンブルの機会が多くなり、この春から芦屋室内合奏団と名丈けは1人前につけて満足し、拙宅で若いOBを中心に月に2、3度練習している。小生は齡はや60、指の運動神経も大分怪しくなっていて、皆の手足まといの方であるが、それでも若い人に負けん気で肩をこらしながら頑張らされているのも合奏者諸君の若さが私に及ぼす影響であろう。若返りという副作用の方に重点を置いて楽しんでいる。ヴァイオリンの功德と申すべきか。来年はささやかな第1回発表会をやりたいと思っている。もとより未熟、お粗末な代物であるが諸君の来援御参加を待つ次第である。（練習所 芦屋市打出浜町 126 拙宅方 TEL(2)0488）

## 戦後の復活と歩み

泥沼の様相を呈しはじめた世相の中にあつて、人手不足、財政難をはじめとする様々な事態がオーケストラを圧迫しはじめた。昭和17年合同演奏会に出演した後、沈滞状態におち入りそのまま活動を止めざるを得なくなった。

そして6年間の空白が続く。しかし、我々の先輩の音楽への限りない情熱は、戦後まもなく息を吹き返したのである。昭和23年千葉修二、石原幸雄、岡島耕一（旧姓宇野）、円満寺正和等の諸氏により、輝かしい神戸大学オーケストラの第一歩が踏み出された。そして、これらの諸氏に加えて、当時グリークラブの指揮者であった柚花氏、米田氏、浅野氏等が活躍され、戦前の神戸商大オーケストラの先輩を探しまわつて経験を聞き、復活の協力が依頼された。そしてこれらの先輩の記憶をたどつて六甲台の倉庫を探しまわり、セロ、バス、ホルネット、アルト、トロンボーン等の楽器類を見つけた。又、同時に上野（学部3回）山中（高商13回）西村（学部8回）岩崎（学部2回）安田（学部11回）等の諸氏等により、フルート、オーボエが寄付されたのである。この他、部員集め、楽譜の入手等の困難と戦いながら、はじめは職員食堂の中で、次には焼けた食堂の2階で、更に雲中小学校の教室と転々としながら練習し仏教会館でマンドリンと共に出演し、猛練習につぐ猛練習の末、遂に、昭和25年末E S S主催のクリスマスパーティーの席上で第1回の発表会が行なわれたのである。教室320号教室である。曲目は、ハイドン「玩具交響曲」「メヌエット」「聖夜」であった。もちろんこの頃神戸にオーケストラはなく、神大オーケストラの名をしたつて来る者も多く、しだいに部員数も35名を越える程になった。

昭和26年、山手女子学園講堂で、その頃あらゆる意味でお世話になったピアニスト田村宏氏の愛弟子広岡洋子さんを迎えてモーツァルトのピアノ協奏曲23番等を演奏するまでになった。

第1回の本格的な演奏会の成功に気をよくした一同は、同年秋の第1回定期演奏会には千葉修二氏の指揮のもとにメンバー43人をそろえて、「ジュピター」「水上の音楽」を演奏し、さらに「ハイドンのピアノ協奏曲」に於ては、三楽章をやりなおして芸術的良心を發揮した。昭和27年には「未完成交響曲」等を演奏し、好評を博した。学校当局も、だんだんと実績を認識し、念願のティンパニーを購入してくれた。

同年夏に、万代、西村、浅岡、吉田、高橋の諸氏ら8名は誘い合わせて強化(?)合宿を瀬戸内海の家島で行なつたが、食事自炊の困難なため、3日間で終了したが、これがオーケストラ戦後初の小合宿であろうと思われる。又、この頃から練習所は妙照幼稚園（雲中小学校の近く）に移つたが、楽器の置場がなく、中本氏の自宅へ、ティンパニー諸共、練習をするたびに出したり放り込んだりしたそうであるから、家族の方々は迷惑されたことと思われる。

このようにして先輩方の努力につぐ努力のお蔭で、我が神大オーケストラの現在の発展の基礎がしっかりと固められていったのである。

翌28年から、今のオケ活動の行事にはなつている合宿も企てられ、彦根に於て合宿及び演奏会が行われた。この思い出を文学部2回生、人呼んで「オケの名物男」吉田昭氏にふり返つていただいた。

## 彦根合宿

戦後初の合宿を彦根に過したのが1953年—そして今は1965年。12年の年月は、その記憶をばセピア色に変色してしまったアルバムを紐解く様なこころもと無いものにしてしまった。それが、恰も幾十年も昔の出来事であった様に、私には感ぜられる。20代の10年間は私の人生にとって如何に大きな精神的な変化をもたらしたか、今更乍らに驚かされるのである。それはあくまでも変化であって、成長とは言いだくない。青春の日の夢と希望の挫折の苦みを何度か味わい、現実、賢くおもねるすべを憶える事をどうして精神的な成長と云えよう。かって、みずみずしく感受性に富んだハートが、年と共に干乾らびて行き、打算と現実の灰汁に革質化して行くのをどうして成長と云えようか。

私が主題から離れて、こうしたくり事を記すのは、さて筆を取ってみて、あの記念すべき彦根の合宿の記憶が余りにも遠のいてしまっていて居る事に気が付き、そして極端に云えば、それに対して一片の感慨も湧いて来ない事に今更乍ら驚き、且つ私の精神的な動脈硬化に我乍ら白々しい思いにかられたからである。青春の日の胸裡に焼きつけられた印象、感激は鎖が切れた首飾の真珠の様に飛び散り、今は手さぐりでその一粒一粒を拾い集めるよりすべはない。けれども、埋もれた記憶を掘りかえすうちに、私の干乾らびたハートを潤おす泉を再び掘り当てる事が出来るかも知れない。

さて合宿は1週間位だったろうか、又参加したのは20人位であったろうか。唯、日程の大半は雨に降られた様に憶えて居る。新緑に満ち溢れた滋賀大学の構内。7月の雨に濡れた砂利道、むせかえる様な若葉の匂い。近江絹絲の女子寮の冷たく高い煉瓦塀。雨の午後、宿舎でポスターを画き雨あがりのたそがれ時、外灯がいやに青白く点る頃濡れた電柱に貼り歩いた彦根の街並、ふとすれちがう見知らぬ人、濡れた黒い屋根と屋根。

白い霧のたちこめた琵琶湖畔、波も無く青まりかえった白い水面から突出た黒い杭の列。白い霧の彼方に音もなく沈んでゆく真赤な太陽——記憶の一片一片は割れた鏡のかけらの様に私の閉じた臉にきらめく。

演奏会は大学の狭い講堂だった。入場料は40円、昼夜2回公演。何人客が入るか賭けようと云い出した者があった。200人か70人か30人か——。2人しか来ないと誰かが云ったっけ。演奏の方は、玩具交響曲で鳥笛が鳴らず失笑を買ったがこれも御愛嬌で大した破綻もなく済んだ。その夜のコンパは少々荒れた様に記憶する。誰かが布団蒸しに会い、誰かが上品とは云い難い十八番を出した。慰安旅行も無く、夜出歩く事も少なかったが、初めての合宿としては、結構楽しい日々を過す事が出来たし、又たった1週間ではあったが、この共同生活が部員の団結の点でこの上もなくプラスになった事を改めて認識させられたものだった。

彦根の街々もあの頃とは随分変わっただろう。あの演奏会に来た人々はその後どんな人生を辿っているだろうか。我々の仮寝の宿であった宿舎は、今でもそのうらぶれた姿を残して居るだろうか。それともあのオンボロ宿舎は、我々の思い出と共に取り壊され新しい舎屋にとって代られて居るかも知れない。けれども、琵琶湖畔には今でも白い霧がたち込め、赤い大きな太陽が今日も音も無く沈んで行くだろう。

この頃柴田昭氏の紹介で元町日本楽器の2階へと練習場を移した。

練習場が、元町本通の賑やかな所に移った事によって練習の行き帰り、より道の楽しみが増えた。

男性諸君はもちろん女性諸嬢にも新鮮なる経験をもたらした。その印象を榎（旧姓安楽木）俊子さんに述べてもらう。

#### なつかしのニュートーキョー

夏の真盛、東京渋谷は日が暮れてからも暑く、飛びこんだ所がニュートーキョー。

神戸にもニュートーキョーがありましたっけ……。オケの練習の帰り道、ワイワイ、ガヤガヤなだれこみ、店の大半？ を占領して、飲んでり食べたりおしゃべりした所です。私のはじめて生ビールを飲んだ所でもあります。そのころ（昭和31年頃）、数年間は、練習は学内でやれず、練習場は元町の日本楽器の2階を借りていて、毎日曜日夕方から練習して居りました。そのため、帰りはいつも三宮のネオンの町中を通り、さっきまでの練習の楽しさも手伝って、ついふらふらとジョッキでもかたむけようかという気分になったのでしょうか。よくニュートーキョーの屋上へいったものでした。ニュートーキョーの屋上は大人数でもすぐにテーブルを寄せて、皆んながひとところにかたまれるので、よく利用しました。

聞くとところによりますと、此頃のオケの方達は練習場も学内にあるためか、あまり皆んなで飲みに行ったりはなさらないそうなので、こういう真面目な方達から見ると、私達のしていた事がまるでできつねにつままれた様に見えるかもしれませんね。でも私達のこういったやり方は実に健康的で、そんな中にもクラブ活動が一層楽しくもなっていくものですよ。練習の帰りは時々しかやりませんでした。コンパの帰りや、演奏会の済んだ後など、きまって、大勢でゾロゾロ、三宮をわたり歩きました。あの楽しさ今思い出しても胸のしめつけられる程、懐かしいものです……。

ここは、渋谷のニュートーキョー。ありました、ありました、昔の私達そのままの姿が……。はなればなれに置いてあるテーブルをいくつもくっつけ、いすを引寄せて、飲んだり食べたり、おしゃべりをしたり……。

なつかしのニュートーキョーの巻ではありました。

記、昭32卒 榎 俊子（旧姓安楽城）

〈なお、この原稿は同年卒の鈴木久子さんの記事をお借りして、榎さんのものにつけ加えたものです—編集部〉

昭和29年教育学部より水谷知久氏を招き新しい息吹を入れ音楽的な熟練をめざしたが、残念ながら実を結ばなかった。学生指揮の伝統に新しい血を導入したのであるが、指揮についての問題及び、技術の向上とサークル活動との矛盾等により、実を結ばなかったのである。これらの問題は、いつの時代に於ても、我々が慎重に考えねばならぬ問題である。この年の夏和歌山の合宿に於て種々の不満が一度に表面化し、田中清三郎氏の言葉によれば「動乱」が起ったわけである。

#### 合宿で動乱起る

今は昔、オーケストラが街の中で入場料を取る定期演奏会などはまだ出来なかった頃のお話——。

あこがれのヴァイオリンを弾きたくて小生が入部したのは現役部員20人位、卒業間もない諸先輩もともどもに演奏していた頃でありました。ヴァイオリンは現役4人位、満身にステージ演奏できる編

成ではありませんでしたが、それでも曲りなりに初めて接したオーケストラというものの感触、高校時代の器楽合奏とは全然別のムードは小生を大いに満足させてくれそうでした。入部間もなく夏休み——合宿。所は和歌山市。先輩諸兄も加わり恰好のつくようにして当地で演奏会を開催するとの事。生まれてはじめての合宿なるものへの期待に喜々とした心をおさえて遠足の様な気分で当地へ向いました。学校訪問の舞台も含めて演奏会まで約1週間、当然練習日は続きます。練習時のステージはまだ先輩も到着していないので第1 Vn は小生共2人、以下絃は2人ずつ位、管も殆んど1管ずつで、凡そ音にならない場面もありましたがそれでも2、3日は練習は続けられました。どうもあまり面白くなく盛り上げられないなとこっそり考え出した3日目位、第1 Vn の相棒で高校時代の同窓である船井兄、セロ弾きの芝田御大が、ひそひそ小生を呼び込んで曰く「おい練習サボってピアノトリオやりに行こうや」と。練習はどうも気分が乗らないとは思っていたものの、我々3人がサボったのでは練習にならない事は分かり切っているものをそんな事をして、まして自分はまだ入部早々の1年生、やめておこうやと、言うか言うまいかぶつぶつ言っている間もなく小生を無理容赦なく楽器店の2階まで引張って行ってしまいました。どうなる事やらとピクピク気もそぞろに落ち着かぬのをよそに、2人は小生にピアノを弾かせこれも弾こうあれも弾こうと涼しい顔、悦に入って弓を奏でる仕末。もともと芝田御大はオケではなかなかのウルサ型顔役という話だったし、又船井兄などは高校で一緒の頃、上級生の指揮者のボイコット運動もやったという前科の持主。あわれ善良な小生は2人にはさまれてただオドオドするばかり。鍵盤をさわるのも上の空、楽しいなんてものじゃないと思っているうちに案の定そこへ指揮者がのっそり——「君達、なんで練習に来んのや、やる気がないのなら帰ってくれ！」自分はもう物は云えませんがとばかり黙りこくっていると2人はひそひそ……。そして売り言葉に買い言葉で「おい、あんな風に言われたんやから帰ろうや」と決めてかかるとさっさと楽器をしまいこみ合宿所へスタスタ。小生も引張られるようにして2人の後へ——。合宿所へ着いたら皆帰って来た。さあさわぎになりました。上級生、マネージャー詰問「どういう積りや。君等が居なくは演奏会は出来ん。何が不満なのや何が云いたいのや」小生は自分が張本人の仲間である事も忘れてただ傍観するばかり。物を言うのも恐しげにすみの方で益々小さくなる一方。こわごとと2人の方を眺むれば2人は今こそ云わしてもらおうといわんばかりのケンマクで「練習の仕方が悪い。あんなやり方ではとても出来ん」とかどうとかえらい鼻息で言い返す仕末。あげくの果て皆の前で当の指揮者も呼び入れて対決——。いやはや大変な合宿になってしまいました。それでもその場はどうやらこらやらなだめられてお互に和解という事で演奏会まで居残る事になりました。そして演奏会もなんとか無事済んだ最後の夜先輩諸氏も交えて反省会をやろうという事に相なりました。勿論今回のこの事件を契機としていろいろ考え合おうという話。なんだかんだと言っている内に例の2人も又云いたいだけ言い始め、又皆もそれに賛成したり反対したりケンケンゴウゴウ。そのうち皆1人1人意見を云え茶な事になったものだから小生もつい調子にのり「指揮者の練習の方法が悪かったと思う」なんて新入生にあるまじき大口を先輩にたたいてしまった。「しまったこれはいけません」と思ったのもあとの祭り。こうなれば調子乗りついでなどと考えて、やれ「もっと新入生にも演奏計画をよく申し伝えろ」とかどうとか先日のしおらしさはどこへやら並居る先輩諸兄の恐れ目付きも知らぬげにぬけぬけとしゃべってしまいました。「やれやれ自分はやっぱりお調子者だわい」と後悔するまもなく、突

如誰からか動議提出、「こんな事ならオケを解散しよう。」「?」ぎょっとした思いで聞いていると「とにかく一時解散してすぐ又召集をかけ、そして心機一転本当にやろうとする者のみが集って最初からやり直したらどうだろうか」——と声がかかった。とたんに殆んど全員が「賛成々々」の声。再び集合の期日を定めてその日の晩にてオケは解散という事に相成ってしまった。あこがれのオーケストラの合宿でこの結末。とんだ事からこんな事になってしまつてと純情なる小生は全くシュンとしてしまいました。夏の暑い盛り、トボトボと又学校に行きそこで再編成の会合。それでもあらかたの者は集って来ました。「一切を新しく始めよ」という事で「今後しばらくは定期演奏会は行わない」「入場料を取る様な演奏活動はしない」「人員不足でもエキストラは呼ばずやれる範囲内の曲しかやらない」……悲しき規約が盛りだくさん定められ、翌年の海員会館進出そして国際会館に至るまでの間の前身としてここに新しきオケが細々とした足を踏み出す事になったのです。そしてあわれなる小生はその時期を境として卒業の年まで、あこがれのヴァイオリンと無理矢理別れさせられるハメになってしまったのであります。

この時期に至り、クナブ活動としてのオーケストラの問題点、部員の不満が爆発し、一時は收拾がつかない有様になった。ある先輩が当時の事を思い出して言っておられるように「あの時は、オケがつぶれかけた」そうである。この年(29年)は、この結果として定期演奏会が行なわれなかった。翌



第一回旧三商大合同演奏会

30年学生指揮の伝統が復活し当時2年生の田中清三郎氏の指揮の下にオケ活動は、再び精力的な活動を行い始めた。同30年特筆すべき事に、第1回旧3商大合同演奏会が大阪産経会館で催された事がある。以後38年に廃止されるまで毎年大阪、神戸、東京と会場を変えて行なわれた。これは他の大学オーケストラ活動を知ることができ、我が神大オケにとって大いに励みになった。

この年夏は、山陰の三次で合宿を行った。この時のエピソードとしてトロンボーン某氏は、舞台(多分ドサであったであろう)のあまりの暑さに、出番を待つ間涼んでいたのだがソレ出番だと言われトロンボーンを抱えてブカブカ吹いたのであるが、気がつくと、シャツ姿のままであったのには観客も部員も驚いたことであった。

12月には、宝塚大劇場で朝比奈隆氏の指揮棒の下に全響連合同演奏会が行なわれ、多くの関西のオーケストラと共に、神大オケも参加した。曲目は、「新世界」etcであった。

翌31年6月、第3回旧3商大合同演奏会東京で持たれ、我がオーケストラからも参加。曲目は、「運命」他であった。

7月には、定例の合宿が、長野県明科で行なわれた。この合宿の様子は、寺岡秀展氏によると次の如くであった。

「明科演奏会」に何か大きな意義を見出して例えば、この演奏会を転機として神大交響楽団は大きく成長した、とでも云えれば良いのだが、何分、現在の環境がおよそ音楽に縁遠いものでもあ

て、この当時の印象も全くはっきりして居ない。引受けはしたものの立往生してしまった始末である。

僕達2年生が徹夜で譜面書きをした朝、夜行列車で松本へ着きタクシーで駆けつけた人。

コップ1杯のビールも飲めなかつたくせに、明科を発つ頃には生ビールのジョッキのお代りがほしくなった人。

怪しげな映画を見に行つて嘔吐を催した人。

飲んではいけない筈の酒を飲んで、旅館の縁側に大の字になってねてしまった人。

明科駅を発つ際、一番ましな旅館の可愛い娘さんが、頭の髪の毛のうすいイヤらしそうな中年男を駅へ見送りに来て居るのを見て、人生観を変えた人。

田中清三郎兄が夜を徹して「慕情」をアレンジして居るそばを、足音をひそめ乍ら下痢の為トイレ通いをした人。

女子団員のふくらはぎに蚊の刺した跡を見て、胸をときめかした人。

風呂で歌をうたつて、女中さんにほめられ、有頂天になった人。

自分の小遣いはなくしてしまつたくせ、演奏会の収益の大金をかかえてうろうろした人。

今は殆んどが、一家の主人、或いはいい奥さんになって居る訳だが、考えて見れば誰もみな、純情であった。

当時の様な素直な心をもう一度取り戻してみたいと思う。

昨今の経済界は、一刻の油断たりとも許されぬ程きびしい状況にあり、僕も毎日骨身を削る様な厳しい商戦に捲き込まれて、消耗を続けて居るが、この文を書き乍ら、何か胸の奥がキューンとして、心がなごむのを感じた。

あの青いリンゴの渋さ、美カ原の水の冷たさ、汚ない旅館の梅干し婆さんの出して呉れたお茶付けの漬物のおいしさ。

明科文化会館（映画館）で演奏した田中清三郎兄編曲の「慕情」「道」。

上田市公会堂での演奏会後行なった労音会員との交歓会。

角力取りの背中に貼れる程大きな海苔でくるんだおむすび、それにあの暑かった汽車、珍らしかつたスイッチバック。

思い出すのはこんな断片的なことばかりであるが、今この文を書いてほしいと依頼に来社された島田君に感謝して居る次第である。

この無意味な一文も、妙な所で意義を見出した様だ。

11月、前年に引き続いて全響連合同演奏会が、大阪産経ホールで催された。指揮は宮本政雄氏、曲目は「運命」その他であった。定期演奏会が、海員会館で行なわれた。指揮は、田中清三郎氏、曲目は、モーツァルの「プラーハ」グリークの「ピアノ協奏曲」ソリストは、塚本保子嬢であった。この時の演奏写真をみると舞台の前面に、木製の台が置かれている。舞台が狭すぎたためだろう。前日頼んで一晩で、会館の楽屋係の人々によって作られたと聞かすが、しっかりしたこの台をみても、その他多くの面で演奏会の準備に部員の苦勞があつたろう事が偲ばれる。いつの日にも演奏会は、合奏以外の雑用を多く提供するものだから。



昭和30年 第5回定期演奏会 海員会館

昭和32年6月には、旧3商大演奏会が第3回を神戸国際会館で迎えた。地元の強みで約45名が、我がオケから参加した。指揮者は田中清三郎氏、ソリスト塚本保子嬢でラフマニノフの「ピアノ協奏曲3番」等であ

った。

昭和32年度の合宿は、松山市で行われた。その年の合宿は、小学校回りのドサと、おまけに一般の観客を対象とした演奏会を開く等、全体的にみてかなりの強行軍であった。合宿前、神戸でかなりの練習をつんだにもかかわらず、あまりにも演奏会が多かったため演奏の方は、満足のいくものでなかった。ドサ回りの曲としては、「軍隊行進曲」「ペルシャの市場」「旅愁」「浜辺の唄」「赤とんぼ」「荒城の月」それに楽器紹介を含めたかなりくだけた演奏を行った。

「ペルシャの市場」の他は、法学部6回生の田中清三郎氏の編曲によるもので、彼の名編曲により、聴衆と一体となった、楽しい音楽会を行うことができた。

生のオーケストラを生れて初めて耳にする者も多く、最初の楽器紹介での、ファゴットのあの奇妙でグロテスクな楽器が、紹介された時には、小学生達の目に異常な輝きを感じられた。さらにドンキホーテを思わせるような音が、バズーカ砲から発せられるに到っては会場がどよめきにつつまれてしまった。

演奏が終りに近づくにつれて、さすがに小学生達も退屈しだしたのか、会場の一部でさわがしくなってきた。数曲つないだメドレーにしたらよかった様に思う。

最後に女の子が1人出て来て礼をのべたのにはいささかてれくさいような感じがした。

そして、合宿の最後を飾るステージは、愛媛大学講堂で、「ハイドンの交響曲第5番」ベートーベンの序曲「エグモント」他数曲であった。全体の雰囲気としては、それまで行って来たドサ回りの気分が抜けきらず、少しなごやかになりすぎた様だった。

宿舎の広い風呂場、虫に悩まされた夜、死ぬほど笑った「貫一お宮」の夜等、数々の思い出を胸に秘め、松山市の合宿はその幕を閉じたのである。

12月、第7回の定期演奏会は、前年までの海員会館から、新聞会館に進出した。この行為は当時としては、冒険であったらしい。今までの収支トントンの発表会であった定期演奏会がその性格を変えた。というのは、この演奏会は、満員盛況となり大成功、純益もかなり上った。



昭和32年 第7回定期演奏会

この結果、定演はオーケストラの重要な資金源となるに至った。この大舞台への進出は、他の音楽クラブにも先がけた快挙（今からおもえばの話だが）であったが、それに対する反発も当然部内、先輩間にもあった。合奏を地味に行なおうとする人々、華やかな演奏会を行い1年の成果をひろうしたいと思う人々、一体我々の音楽は有料で聞いてもらうものなのか、いや資金をかせいで一層のオーケストラ発展に使おう等々、現在でも現役が、時として悩まねばならぬ問題があらわれた。成長していくクラブの持つ悩みといえるが、その裏づけとしての演奏の向上も又見逃がす事のできないものであった。演奏、マネージの面で色々と先輩の助言がオーケストラの強力なバックアップとしてあったことも大いに幸いしたといえる。

さらに円熟味を加えた田中氏の指揮は協奏曲での危急を沈着に救い、その落ちつきは、彼の名声を高めた。

翌年、3年間指揮者を続けられた田中氏に変わり同じ法学部の小泉良氏にバトンが渡された。

この年は、伊藤れい子嬢が活躍され、ヴァイオリンのソリストとして都合3回弾いていただいた。

同年夏は、富山に於いて合宿を行った。スポンサーは北陸電力の安村善一氏（高商18回）で御援助願った。なお、演奏会の券を売するために（又は、スイカを得るために）炎暑の富山市内を歩きまわる努力も当時部員全員で行なっている。

11月、第8回定期演奏会が、竣工間もない神戸国際会館で持たれた。新聞会館と会場費が同じでしかも広いめだったと言う。ソリスト伊藤れい子嬢でサンサーンスの「ヴァイオリン協奏曲」ベートーベン「英雄」等であった。7年後の今日、思い出の国際会館で50周年記念音楽会に再び「英雄」の聞かれること、又、小泉氏指揮の先輩合同演奏が行なわれるのは、奇しき巡り合せというべきでしょう。

昭和34年、我がオーケストラは、先輩方の過去の経歴によるキャリアの増加等により、或る程度の安定したテンポで前進を始めた。

夏期の合宿も、下関の有力スポンサーの後援を藤原興マネージャーがつかみ、金回りのよい合宿という、現在では考えにくい状況であった。この下関合宿については水垣氏に登場願おう。

昭和34年7月21日夕刻、大先輩差入れになる大きな鯛の塩焼を一寸つついてから、演奏会場へ乗込んだ。その日は大雨のやんだあとだったと思う。すがすがしい夕方だった。

演奏会場の梅光女学院は、たしか丘の上にある学校で、講堂の裏は崖の上になっていた。演奏前のトレーニングのつもりでトロンボーンを思い切り吹いていたら、切通しの向うの丘の家から人が此方をにらんでいた。

長谷川君の指揮で、「セヴィラの理髪師」「白鳥の湖」より抜萃、「未完成」「眠れる森の美女」ワルツを演奏のあまり音響効果のよくない会場で、客席で最初の曲を聞かれたOBから、ボリュームが少いと御指摘があった。演奏の出来としては、特に印象に残っていない。「白鳥の湖」なんかあまり冴へなかったようだが、全体的には当時の水準で「まあ普通」というところだっただろう。

まことに無責任な記憶だが、この年の合宿は、小中学校での巡回演奏、所謂「ドサ」が比較的多く、この演奏会までにステージ慣れしていたのと、会場も学校で、それまでと大して変らなかった為か「演奏会」とはいうものの、特に改まった緊張感がなかったといえる。

とはいえ、何といても合宿中のメインイベントであり、唯一の一般公開演奏会だけあって、終了後は流石にホッとして、宿舎へ帰って改めて鯛の身をつついては、気エンを上げた。この年の合宿は先述の如く、ドサが比較的多く少々忙しい思いもした。練習は何とかいう幼稚園までトコトコ出かけていったが、練習量も多く気合もよく入っていたと思う。練習やステージの合間に、食品会社の冷凍室やソーセージ工場の見学、海水浴、例年行事のソフトボール等盛沢山で、今から思へば、いささか「優雅すぎる位」の生活だった。

僕は3年生であったが、トロンボーン吹きとして練習のしがいもあり張切って過した。それに予想以上に金回りがよくなって会計係として藤原マネ氏の敏腕に敬服すると共に、彼氏とニヤニヤし合った。

しかし今でも「下関合宿」といえば、すぐにピピッと頭にうかぶものは、おかずが多く、食べ物のタツブリあったことである。

35年には、7月、国際会館に於いて、第1回文化フェスティバルに出演した。曲目は「未完成」などで指揮は、長谷川、中島の各氏であった。同月、新潟に於て合宿及び、演奏会が行なわれた。

この合宿について鈴木肇氏に語ってもらおう。

### 新潟合宿の思い出

「今から5年前、私が3年生のときの合宿であるのに、まるでもっと遠い昔の様な気がするのはなぜだろう。

1960年7月13日夜8時20分大阪発の各駅停車で我々約40人のオケメンバーは新潟へ出発したが、その日は夕方からひどい雷雨で、行手に何か不安な気持を憶えたことであった。

翌日の午後1時33分新潟駅へ降り立った我々はまず、駅前の広くて立派な道路に目を見はり、出迎えるバスをはじめ新潟交通のバスが全部土地産出の天然ガスで走っている事を知って又々びっくりしたものだ。

そのバスで約10分、到着したところは新潟鉄工株式会社入舟荘といって、ちょうど信濃川下流のデルタ地帯にあたり砂ぼこりの多いさびしい下町であった。

合宿の日々は楽しかった。ドサ廻りは新潟高校と他に二つほどあっただけで、毎日の日課は来る定期演奏会の為の強化練習が主な目的であった様に思う。

午後の自由時間には必ず多勢で海水浴に出かけた、満員のバスに揺られて、今でも思い出すあの日本海の黒々とした水平線、そして真っ黒な砂浜、そこで我々はしばし時を忘れて戯れたものだ。

7月23日の夜、演奏会のステージは殆んど印象に残っていない。曲目もエグモントなど簡単なものだった。

翌朝8時半我々の乗った大型客船「ゆめじ丸」は新潟港をあとに目指す佐渡が島へと出帆した。いよいよ合宿の最後を飾る慰安旅行である。いつの間にやらメンバーも56名の大世帯になっていた。

佐渡では名高い金鉾の跡や、尖閣湾などを見物し、流人の島と云われるだけあって岩々の立たずまいまでがもの悲しい相川の海岸の宿で一泊、その夜は遅くまで浜辺で唱うもの、語るものなど、楽しい思い出のひとつであった。

帰路、我々気の合ったもの同志6人が皆と別れて信越本線に乗り、途中出会った学生の推めで湯沢温泉の近くの「石打」と云う駅で下車し、「高半」というひどくひなびた宿屋へ夜遅く強引におしかけた。冬にはスキーでにぎわうと聞いたが、驚いたことに女中など一人も居らず婆さんとその息子らしい若い男と、孫みたいな女の児と3人で行商人などを相手の宿屋であった。けれどもその夜の料理のうまかったことは今でも忘れられない。翌日宿料として払ったのが6人分で3千円だった。

次の日、東京へ出た我々は先輩の小泉さんや坂本さんに有楽町で夕食をごちそうになった上、「車中でおやつでも……」と別れ際に千円だったか貰ってとてもうれしかったのを憶えている。わずか5年前のことだけに思い出す度にちよっぴりはずかしく、それでいてなつかしい。

又、この年戦後オーケストラができて10周年になり、これを記念して、創立10周年記念誌が、半年余の努力の末、戦前の歴史を掘り出すのに成功し、誠に立派な本として発行された。

翌36年の合宿は、当時2年生であった俵さんに伺った。

「この年、合宿は工学部の移転準備とかで、8月に入ってからになった。

朝、湊町から汽車に乗り、昼頃には津市の午前の一身田の駅で降りた。ひなびた所で、楽器を運ぶ車もなく、暑くて、重くて、道にそった白壁がいやに長かった。そこは高田派の総本山にあたる寺を中心にひらけた門前町でその寺の一角にある食堂が宿泊所兼練習所であった。境内には本堂、講堂、社務所、鐘楼等の立派な建物があり、ハス池にはびっくりするほど大きな白い花が咲いていた。全く申し分ない環境だったが、少々衛生的でないのは長い机は、練習用のイスになったり、食卓になったりした。井戸の水枯れは、顔を洗わない者を公然と育て、着がえがなくなっても洗濯をしない習慣をつくった。

練習は朝昼晩とあり、ヴァイオリンを始めて2年目の私は歯ががくがくするほどしぼられた。大半が私と同様のセコバイを前に、演奏会をひかえた指揮者も大変だったと思う。私達もひっしだった。弾けない所を何倍ものテンポにおとし、先輩に音を聞いてもらいながら何回も何回も練習した。確か未完成のKであったと思う。

練習は私にとってはげしいものであったが、その後の福岡、名古屋に比べれば、余裕のある合宿だった。合宿の『あるべきもの』があった。夜はハス池のカエルに悩まされ、朝は早くから男子部員の部屋の祭壇で始められる木魚伴奏のおつとめに悩まされ、昼は夜禁じられた金管のけたたましい音に悩まされ続けられながら、それでも毎夜、遅くまで、境内に三々五々散り、好きな所で、好きな人と月を見、星を見、顔を見て、話し歌い笑った。又、チリンチリンとカネをならして、リヤカーでおじいさんが食事を運んで来てくれる間、みんな階段や窓にすわってよく話していたように思う。

演奏会までの一日には慰安日があって、気のいい二人に留守番を頼んで、津の浜に泳ぎにいった。中には近所の子供を連れて行く人もあった。

近くの工場での演奏会と部員の神田さんのメンコン含む四日市の演奏会の終った翌日、大望の伊勢志摩国立公園に向った。伊勢大神宮を横目に見て、一路、かしこ島国民宿舎へ——。ここで10日間粗食に耐えた体に十分栄養をつけ、解放された気分を、真珠養殖中の海の中で味わった。

この夜、海に続く宿の庭の草の上ですわり田中清三郎さんの指揮で未完成を口演奏した時のしみじみした楽しさは、その後未熟な技能にもかかわらず、あつかましくもオケを続ける大きな力になっ

た。残念ながら卒業まで2回の合宿にはそんな機会はなかった。

37年夏の合宿は、又もや、凌霜先輩の岩田屋百貨店の中牟田氏の物質的、精神的御協力により多大の差入れ、慰安旅行の御手配等、実に有難かった。広々とした内庭の食堂、食べれば舌に色のつくミヅレ、分解途中のような、運動場のはずれにある校舎での夜の練習、ものすごい蚊の群を殺しては、ホウキで掃いて捨てたこと。猛練習。博多及び小倉での演奏会。耶馬溪への慰安旅行の長いバス道中。太宰府天満宮で学業優秀になるよう一心不乱に祈る御人、これは当時の1年生の断片的で、気楽な思い出である。これに対してマネージャー氏はどうであろうか。当時のマネージャー曾野氏に語っていただく。

### 曾 野 健 三

〆10月6日、オケからの封筒を受け取って驚いた。50周年記念誌原稿云々と記された促速状である。学生時代あれほど青春の情熱を傾注したオーケストラに対し、依頼されていた原稿をすっかり忘れていたのだから、我ながら情なく、又申し訳なく思った次第である。朝から晩までエレクトロニクスに追われているうちに、いつしか音の世界から取り残される結果となりはてました。依頼された原稿の内容は「九州合宿」についてということでありましたが、この言葉を想う毎に、紺碧のそして真紅な思い出が脳裡に過流をよび起します。岩田屋百貨店、天神町、コレラ、ガラガラする太陽、ブルック、チャイコフスキー、病魔、蚊。なんともいいようのないノスタルジャとあれを想起こす自己に対して感ずるアニュイー。文才に恵まれぬ小生には、とても九州合宿を活字に整理することはできませんまい。しかし何という奇遇か。博多電気ホールと小倉市民会館での演奏会を終えた翌々年に、日本板硝子若松工場へ勤務することとなりました。学生気分抜けきらぬ春4月、任地につくやまっ先に博多へ向けて快速列車に飛び乗ったものでした。そして又1年、研究所勤務で神戸に帰った水を得た魚は、果して学生時代にその若いエネルギーを学問以外の道に湧き出させたことが、誤りではなかったのかと煩悶する羽目となりました。浅才非学の学生がその本分である科学の探究を怠ることは、大いに問題視するべきではなからうか。「学問とクラブ活動」といえば、高校時代の討論会用の論題ですが、実際には、これこそ大学生の一大テーマとして議論するに足るような気がして来ました。音楽にうつつをぬかし、文学のとりこになり、その実アルバイトと試験の板バサミというディレンマに陥入り乍ら、それに気がつかず盲進した小生の学生時代。今にして思えば、恥かしくもあり、又痛快な絵巻物であったような気がして、苦笑を禁じえません。会社生活に踏み込んだ若人や中老の諸氏が、「学生時代の放蕩」を嘆き「もう少し勉強しておけば……」と述懐するのは、自己弁護と逃避のための常套手段にすぎないし、それは弱き人間の啼観というものかも知れません。その苦汁を呑まないための努力こそ、学生時代にやるべきであったらうと反省すると同時に、現役諸氏にも一考を促したいと考えます。

何とはなしに始まっていつのまにか終る。何を書かんとしているのか主旨がはっきりしない。今だもって迷筆家の小生です。

3月には例年通り、教育学部卒演の伴奏及び演奏を行なっている。

昭和38年5月開学記念祭の後、8月名古屋に於て合宿を行い、ベートーベン「第8番」等を演奏し



昭和38年 名古屋での演奏会



昭和38年 楽器運びを終わって教育学部で

トから、ゲゼルシャフトへと移行したのである。そしてその結果、今までの家族的な雰囲気から比較的厳格な体制が必要とされ、役員陣の増加、及び職務の区別化、強化がなされていった。そして指揮の面に於ても、これまでの学生指揮だけでは、精神的にも能力的にも、無理が生じ、専門家に来てもらって、指揮をしてもらうようになった。大阪フィルハーモニーの副指揮者である泉庄右衛門氏におねがいはしたのである。それと共に、学生指揮者には大軒護君が立った。

6月には、新1年生の親睦を旨とした、姫路、手柄山での小合宿。美しい白鷺城が印象的であった。

7月、金沢において恒例の夏期合宿。合宿所は白山のふもと、あらゆる意味において、環境のめぐまれた公民館であった。規律がきびしく、10時消灯、6時起床。『白山の……』という石川県民の歌にたたきおこされ、眠い目をすりながら、朝の体操へとしぶしぶ参加。山崎君の体操の才能が認識されたのはこの時である。以後彼は、合宿の体操の先生として、なくてはならぬ存在となった。『君が代』のレコードをバックミュージック

に流しての国旗掲揚、館長さんの朝の訓話で毎日が開始された。消灯のはずの真夜中、奥の男子の部屋では、医大の富岡氏と一升びんをまん中に、いろいろな講義が行われ、下級生一同、有難く拝聴した次第である。合宿の中日に河原へ出てファイヤーストーム。明日の晴天を約束し、一日の最後の光りを空一ぱいに放ちながら、今まさに落ちんとする夕日を受けて、赤く映えていた橋が、妙に心への

た。台風の影響か出足は鈍かった。しかし会場は立派な会館であった。

合宿所は、名大の寮で名古屋城の中にあった。便所が不潔であったので男子諸君自転車にのって、県庁の近くの病院まで用をたしに行ったことも思い出の一つ、朝昼晩と練習が続き、終わりの風呂は、30分ばかりの散歩で

あり、せんじ（名古屋弁でかき氷の事）を食べ、だべる娯楽となった。名古屋城内にあって城をみた者、みない者、暑く忙しい合宿であった。

12月の定期演奏会では、部員の原久美子嬢のピアノソロで、ガーシュインのラプソディーインブルーが演奏された事は特筆に値する。新世界交響曲が演奏され、好評を博した。

39年、姫路分校が鶴甲に移り、新入部員の著しい増加をみて、オーケストラも大世帯になり、いわゆるゲマインシャフト



昭和39年 金沢合宿の食事風景

こっている。ゲームに興じて時を過ごす。空を仰げば満天の星、目の前には、火を通して見る紅潮した友の顔、顔。ここに合宿ムードは最高に達した。この日以後、諸先輩が応援にかけつけて下さり、毎日、緊張した練習が続いた。人数の増減がはげしかったので、人数確認にテンテコマイしていた食事係が気の毒だった。演奏会は金沢の観光会館で行なわれた。曲目はニコライの「ウインザーの陽気な女房たち」、「未完成」、準部員の長尾誠子嬢のソロでモーツァルトの「ヴァイオリン協奏曲第四番」が演奏された。アンコールにやった「狩」の富田肇先輩による「ピストルゴッコ」が好評を博し、会場の人気をあつめた。

12月。神戸及び、はじめての大阪進出である産経ホールでの連日にわたる定期演奏会が行なわれた。指揮、泉庄右衛門氏、大軒護君。曲目は「運命」外山雄三の「ディベルティメント」その他。当日は会場に外山雄三氏を迎えた。オリンピックの五輪マークで色どられた、39年、西暦1964年。神戸大学オーケストラ部も従来の学生指揮者だけの伝統をうちやぶり、泉氏という若き、情熱に燃えた指揮者を迎え、昭和40年度へと、うけつがれて行くのであった。4月。六甲キャンパスに、朝の6時半からあつまって、新入生確保の為の受け付け作り。各クラブ、もっとも確保条件に適した場所を陣どるために懸命である。1年生にアピールすべく、ポスター、看板、ビラを配って待機。この4月の勧誘風景は毎年の行事ながら、実に楽しいものである。希望にあふれた1年生が、両手にいっぱいビラを手にして半分は嬉しそうに、半分は迷惑そうな顔をして上級生の勧誘のたくみな美辞麗句を聞いている。かくして、各クラブの争奪戦を通してオーケストラ部に入部した1年生がはじめて経験したオーケストラの合宿生活、6月の嬉野での小合宿について、1年生の某君は次のように感想をのべてい

## オケつれづれ

的野浩子

高1の夏休み、鳥取県との県境に近い岡山県真庭郡のある寒村に滞在したことがある。そこは姫新線中国勝山駅から国鉄バスで1時間程入ったであろうか、村の中には小学校と中学校が一つずつあるにすぎなく、澄みきった空気と風光の美しさにもマンネリズムになった村人の単調な生活が続いていた。そんなある時、岡山市内のアマチュア合奏団（オーケストラと云えるほど大がかりなものではなく、メンバーも小、中、高校生であったと記憶している。）がやってきて小学校で演奏会を開いた。いわゆるドサまわりの地で喜々として演奏する同年輩の人達の顔に音楽を奏でる喜びがあふれていた。

私にはこの時以来、自分もハーモニーを作る一メンバーにかわりたいという気持があった。当時私が通学していた高校には楽器部らしきものもなく、やっとそれが実現の運びになったのは大学1年の後半、神大オケに入部してからのこと。家に残っていた大正時代の遺物の、あまり上等でもないバイオリンを修繕しての念願成就である。と云っても、もともと楽器は何一つさわれない私のことであつたから最初の半年は開放弦の鳴らし方から手ほどきを受けなければならぬ。私の為にならぬ貴重な時間をさいてこれをして下さったのが鈴木（旧、田中）ミチさんである。

る。

6月の中旬の小合宿は、部員の親睦、技術の練磨、日頃オーケストラを聞く機会のない人々に少しでも生の音楽を聞いてもらう（注この小合宿を利用して三木市の小中学生、3校で演奏会を開いた。）などの目的について、一応の成功を得られたと思う。唯、我々1年生にとっては、授業をぬけたという事が心配の種であったけれども。この合宿を通して神大オーケストラ部というものがどんなものか実感として理解できたと思う。上級生の人柄のみこめた。又、演奏後の拍手は、大学祭の時と何か違った感動をかきたてられた。この合宿を計画し実行した2年生を傍から見ていて、その仕事のむつかしさもわかった。何事においても部員一同の団結というものをいかに必要とするかということも分った。しかし、この合宿にもいくらかの脱線があった。夜、男子宿舎で、寝ながら大声で歌をうたった事、積んであるふとんの山で胴馬をして公民館の館長さんにおこられた事など……。全体としては非常に楽しいものであったし、今後、部の中心をなす1、2年生にとっては大変良い合宿であったといえよう。

7月、株価の暴落に反映される日本経済不振のあおりをくって、今年度大学卒業生の就職は困難をきわめた。この事実に関する記事が、各週刊誌を賑わし、実際に、オーケストラの4年生からも苦勞話を聞き、やがて、来年、あるいはさ来年、せまりくる我身の行くすえを案じ、夏のひでりの中を汗をふきふき、オーケストラへ。『勉強とクラブ活動の両立』という事が、いかに大切な事であり、是非とも実行せねばならぬと、改めて思いおこされた。7月末から夏期合宿がはじまった。松山市の重信町において行なわれた。毎年合宿所の選定にはマネージャーが最も苦しみ問題なのであるが、第

このようにしてメンバーの一員になってからは時には高く、速い音楽が弾けないでこっそり弓を浮かすことに専念したり、時には楽符写しにフーフーと嘆息しながらも楽しいオケ生活が始まった。春は六甲台の緑が一段と濃くなる時に講堂での開学記念祭、夏は合宿兼地方演奏会、秋には恒例の定期演奏会、冬は教育学部音楽科の卒演に賛助出演、と毎年オケの歴史は四季を通じて新しく生れていった。

が、この四大行事の間に行なわれた幾つかのドサまわり。以前岡山の山奥で客席から見たものが主客転倒してみると、これはそんなにも喜んでばかりいられなくなった。地方の隅々まで音楽教育の普及した今日、未熟な私などの演奏をわがもの顔に聞かせることは都会人の持つある種の高慢にすぎないのではなからうか、と考え始めたからである。

神大オケはあくまで一つのクラブにすぎない。しかし音楽技術の底辺が非常に発達した社会でアマチュアならどこまで演奏技術を落してもいいと云うのであろう。いつも気にかかりながら、私自身の技術がそれ相応に向上しない為、この問題は未解決のままに再びオケの外の人となった。現役の方々がこういった技術の問題をも乗り越え、今後ますます楽しいオケを作って下さることを望みたい。

オケを離れて3年数箇月、せめてオケの思い出に演奏会の録音を自分のテープに入れておこうと思っていたのだが、怠惰な私は未だそれをもなし得ないでいる始末である。

1の条件として経済的に赤字でないことが絶対に必要である。又、60名に近い人間を1週間以上宿泊させなければならない事、これに加えて、或る程度の広さをもった練習所を近辺に備えていることが必要である。先輩の力に依存した演奏会を行なうことによって経済的には黒字とまで行かなくても赤字を防ぐことはできるが後者の問題については、適所をさがすのは近年益々困難になりつつある。このような問題をかかえた今年度の夏期の合宿の企画に着手されたのは、昨年の7月頃であった。出だしは好調で、最初の計画では演奏会を二、三行なうという、演奏旅行の形式が考えられたが、いろいろ困難な問題にぶつかり、結局、今年になって例年通りの形の合宿となった。6月になって松山市に赤痢が発生し、重信町にて合宿する事が危まれた。あまりにも突然のことで、一時は合宿中止という問題まで起り、神戸で短い合宿をして直接松山市での演奏会に臨まなければならないという気配であったが、幸い7月の末になって赤痢の嵐もしずまり、危機一発のところ、重信町にて合宿が可能となった次第である。この合宿地の選択に関しては、次代をうけつぐマネージャー連の最も考慮を必要とすべき問題となるであろう。

この合宿後の反省会から、主なものをまとめてみると、一に、合宿へ行くまでの練習が不充分である、二に、合宿では個人の技術向上を目的とするか、オーケストラ全体のアンサンブルをまとめていくか。三に、選曲。今度の場合、特に難曲がかさなり、消化しきれなかった感があった。それ故、せっかく来ていただいた泉氏の技術的要求についていけず、専門家をわざわざ呼んだ効果がなかった。四に、演奏での技術的な不注意以前の、不注意があまりにも多すぎた等々。合宿が単に「楽しかった」の一語でおわる事なくして、これらの諸問題を提起し、これからのオーケストラの合宿活動の方向づけに役立てば幸いであろう。松山演奏会での曲目は、ベートーベンの「シンフォニー1番」「エグモント」、サンサーンスの「ヴァイオリン協奏曲3番」及び「フィンランディア」。この合宿で特筆すべきは、1年生の相互の団結力のかたさである。荷物運び、楽器運びの際の1年生の機敏な協力体制は目をみはるばかりで、合宿運営にあたってその中核をなしたと思われる。

9月から10月にかけての試験をすませ、今や我々は目前にせまりくる、50周年記念、定期演奏会の練習に全力をそそいでいる。我々はこの50年間をふりかえる事によって、現在我々が存する立場を次の時代への接点として、今まで以上に深く認識する事ができた。諸先輩から50年の長きにわたってひきつがれてきたこの音楽精神を、50年後の若き後輩たちにまで伝える為に、我々が、がんばらねばならないという熱意にもえている。

今  
先  
から  
はさ  
の面  
言  
は、  
った  
が、  
しみ  
一ケ  
響友  
って  
作れ  
感じ  
なこ  
らえ  
編  
べき  
一  
名譽  
パー  
てい  
めて  
は、  
てお  
ス

## 編 集 後 記

今年4月、創立50周年を記念して何か行事をやろうという事になった。先ず記念誌の発行と先輩によるワンステージの案が出された。記念誌発行の準備は、7月末、原稿を依頼することから始めたが予想に反し、戦前の方からの寄稿が多かった。この小冊子の目的は先輩の挿話をはさんで、通史を書くことであった。すでに5年前りっぱな45年誌ができており、我々は、別の面からオーケストラ活動を示そうと思った。

言葉を換えれば、そうせざるを得なかったとも言え、部全体が結集した前の本にくらべ今度、比較的小数の部員がこの製作にあたった。あれやこれやの都合上この小冊子が、できあがった。興味深く読んでいただけるだろうか、戦前戦後の先輩の原稿を時を追って並べてみたが、そこには、テーマを設定しなかったにもかかわらず、自ら学生オケとしても楽しみも、苦しみも表われ、過去への追憶と現状への批判が如実にあらわれている。この小冊子は、学生オーケストラに青春を過したということによって、青春の書であると言えるだろう。年に一回の響友会報、年に二、三回出されるだろうオーケストラの部内報、これらは、次々と堆積していつ一つのまとまりはないが歴史資料となっていくだろう。我々が、充分まとまりのある本を作れたとはいいいくいが、時々の(10年に一ペンかの)通史の一つを作る事ができてうれしく感じる。曲りなりにも歴史であるからその時々の部内の雰囲気や記述に反映することは、当然なことである。この小冊子や、響友会報やオーケストラ新聞から現代学生気質を感じとってもらえれば、古き先輩との交流の助けとなるであろう。

編集委員会に先輩を加えなかった事、あまり先輩の話をお聞きしなかった事等、種々反省すべき点を含みながら、できあがったのがこの本である。

一方工学部の前身、神戸工専に於ける音楽活動をさぐってみようとした。神戸大学工学部の名誉教授である中西雄氏宅を伺い当時のメンバーをお聞きした。時間的に間にあわないが、5ページほどの小冊子が、響友会報の形で工専の音楽部旧メンバーの方の原稿を出したいと思っている。中西教授の話によれば、昭和の初め、今の兵工高の学生らと共に日本でおそらくはじめてボレロをブラスバンド演奏されたという。その後戦争終了までブラスバンドの形で、時には、弦楽合奏の形で存在した。中西教授の教え子の中には、神戸高校のブラスバンド指揮をしておられる竹本先生や、松山BKオーケストラで、指揮編曲などやっておられるヴァイオリニスト和田定範氏等がおられる。いずれくわしくは、お知らせするつもりです。

編 集 者 一 同

編集委員長 T14 野 間 雄 二 副委員長 E14 片 井 宏 至

委員 E14 青 柳 良 B14 島 田 輝 史 J14 大 軒 護

L13 平 島 直 子 L13 原 久 美 子

なお、色々と先輩に御協力していただきました。ここにお礼申し上げます。

最後に、非常に短期間にまづい字の原稿をもっていき、迷惑をかけた藤原印刷の皆さんに感謝します。